Why not Mac?

vol.1

Employee Choiceの価値

“与えているのではない、
選ばれているから価値がある”

なぜ選択制が、なぜMacが、今求められるのか？

アップルのビジネス向けのWEBサイトが更新され、「アップル・アット・ワーク（Apple at Work）」のプログラムがスタートして1年が経過しようとしている。国内においても、アップルのチャネルパートナーを通じて、本プログラムの展開が本格的に始まる段階だ。アップル・アット・ワークとは、シンプルで直感的に使うことができ、セキュアで簡単に導入できるアップルデバイスを、ビジネスの現場でも活用するためのプログラムである。従業員の生産性を高めるだけでなく、従業員が使い慣れたツールを使うことで、意欲の向上、当事者意識の芽生え、ロイヤリティの向上などのメリットを得られるものである。

現代の従業員の働き方はあらゆる役割が「ナレッジベース」に変わってきており、組織構造に束縛されず、より自立することが求められている。また、モバイルの普及により、常につながり、どこでも仕事ができ、他社とのコラボレーションや豊富な情報&データを共有しながら、その場で意思決定ができる状態も望まれている。

このようなニーズに対して、職場全体で従業員がアップルデバイスを最大限に活用できるようにするのが、「選択制（Employee Choice）プログラム（Employeeは従業員という意味）」である。業務で利用するIT機器を従業員が選択可能になることは、企業の競争力を維持することにもつながるほか、企業文化にまで良い影響を与える。たとえば、人事や採用部門では有能な人材を惹きつけ、定着させるために活用できるのだ。選択制プログラムを実現するには、日頃からIT部門が社員に対して、テクノロジーをどのように提供しているか、活用方法をどのようにサポートしているか、IT部門の姿勢を根本的に変える必要がある。

企業内におけるiOSデバイスの浸透により、アップルデバイス導入の障壁は下がってきている。モバイルデバイス管理（MDM）によるワイヤレスな管理によって、導入時のプロビジョニングやアプリの配付、運用時のセキュリティ対策も容易になった。さらにアップル・ビジネス・マネージャ（Apple Business Manager）のDEP（Device Enrollment Program）とMDMの連携によるゼロタッチ展開を採用することで、導入時のキッティング工数を大幅に削減することが可能だ。このiOSデバイス導入の成功体験を元に、Macでも同じ方式を採用することができる。

現に、Macの企業導入は加速している。海外の事例としてはIBMやSAP、キャピタル・ワンのような企業が、iOSデバイス同様のユーザ体験や、Macの市場残存価値、ソフトウェアコスト、管理コスト、サポートコストといったPC導入時のTCO（Total Cost of Ownership：総所有コスト）がウィンドウズパソコンと比較して低いことなどを理由に、Macを採用した。また、アップルデバイス向けに統合デバイス管理システムを提供するJamfが行った調査レポートで、従業員のほぼ4人に3人が職場でウィンドウズパソコンよりもMacを使いたいと答えていることも、他の企業がMac導入を検討する後押しとなっている。

しかし、ここで重要なのは、Macを従業員に与えることではなく、従業員が望む環境をいかに提供できるかだ。Mac導入を検討するうえでもっとも大事なのは、従業員が選択できる環境をなぜ提供しなければならないかをよく考えることだ。企業におけるMac導入は一過性の流行ではなく、一人一人が自分の好むデバイスで仕事に取り組むことが、もっともパフォーマンスを発揮でき、企業の成長や競争力に貢献できるからである。

その目的を見誤らなければ、これまで企業内でIT部門が対応することができなかったMacを既存のシステムと統合したり、ウィンドウズパソコン中心に作られてきたセキュリティ基準と同等にMacを管理することなども、大きな壁に感じることはないはずだ。